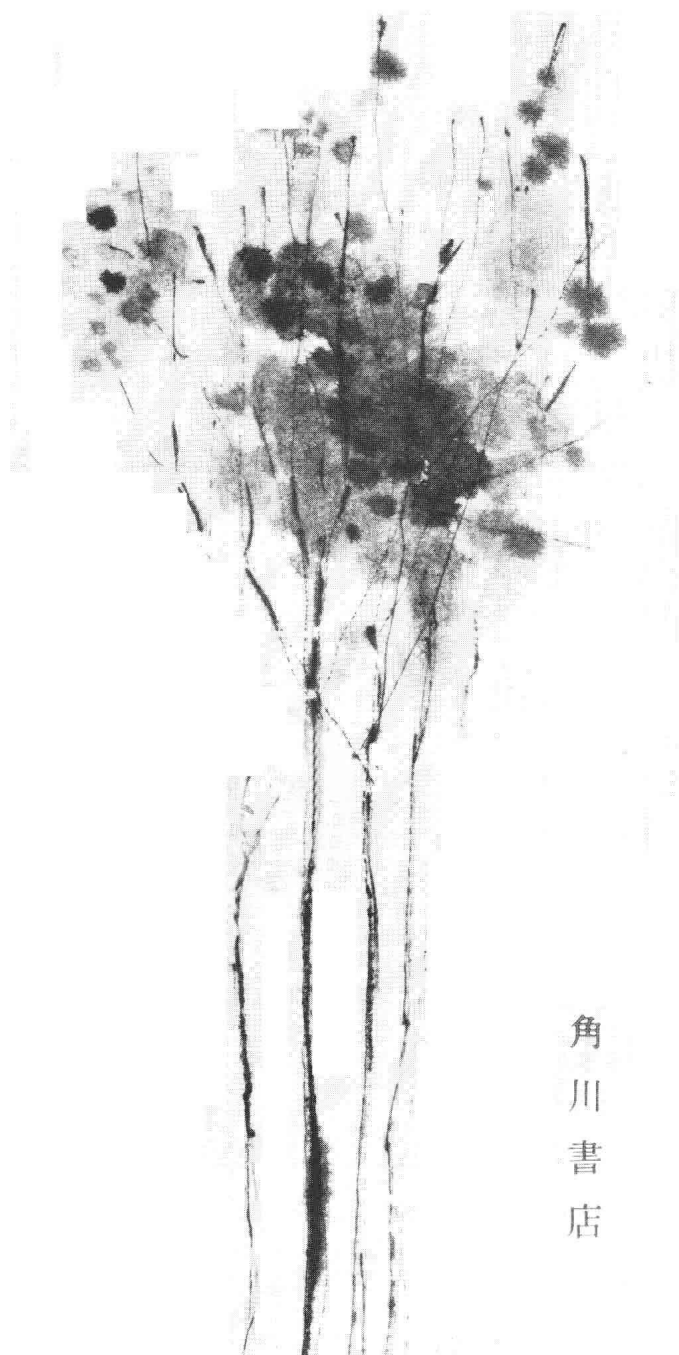


明治恋風

明治恋風

岩下俊作



角川書店

書名 明治恋風

昭和三十四年十二月五月初版印刷
昭和三十四年十二月十日初版發行

著者 岩下俊作 いわした しゅん さく

発行者 角川源義 かく かわ しげよし

兼者 草刈親雄 くさ かり ちかお

製本者 株式會社 角川書店 かぶしき かいしゃ かく かわ しょてん

印刷所 東京都千代田区富士見町二ノ七
振替口座東京一九五二〇八番

定価 貳百七拾円

落丁・乱丁本はお取替いたします

目次

藤田組質札事件

五

名古屋事件

八五

元老院公金拐帶事件

一九

明治
恋風

藤田組質札事件

強い夏の陽差しが柿若葉を反射して、濡縁に腰をかけた女の頬を緑色に染めた。女は足許の苔の花を見詰めたまま、男との中途半端な関係を早く型をつけてくれろと小声で訴える。男は、茶色に褪せた古畳の上に端座して、矢絣の単衣をぎゅっと締付けた博多帯の下に膨らむ、腰から臀部の豊かな肉体を舐めるように眺めて、ああ俺はこの若い肉体の強い魅力に引きこまれて、とんでもないことを考えている。問題はこの女でなく、強欲な父親石原巖にある。世間並の父親であれば、これ程深みに落ちた二人の間を黙認して、正式の夫婦にする筈だが、金を持たぬ風来坊に大事な娘はやれぬといきまぐ。俺だって西南戦争のときは藤田組の手代として人夫の五十人も使って、数千円 of 金を自由にした男だ。それを甲斐性なしだ空らっけつだ——よし、それなら俺がどんな力を持っているか思い知らせてやろう——

「……お母さんはね、そんな酷いことは言わずに好いた同士を一緒にしてやったらと口を酸っぱくして頼んでくれるんだけど、どうしてもお父さんが駄目なの。それでお母さんは、もうこうなっ

ては仕方がないから木村さんと駆落ちしなさいって、ねえ、木村さん、お願いだから私をつれて逃げておくれ。それしか方法がないわ」

指がくの字に反り、爪先きの血色がなくなる程強く濡縁を押えている。女は必死である。

「お千ちゃん、いよいよとなれば駆落ちでもしなければならんが、もう暫く待ってくれ。きつとお父さんが納得してくれるようなことになるから」

「もう暫く、もう暫く、って、私その言葉は聞きあいたわ。貴方が本気になってくれなけりゃ私は辛くて……」

声をあげて泣きはしないが、頬を伝う泪がぼたぼた落ちた。

「お千ちゃん、俺がもう暫く待てというのはい言い遁れや胡麻化しじゃないんだ。こうなったら、なにもかも打明けるが、実は近々に藤田組から家一軒と四千元貰うことになっているので、家と金さえあれば、天下晴れての夫婦になれるじゃないか。それ迄の辛抱が出来ないのかなあ」

「いつ、そのお金を貰うの、又どういう訳で四千元の大金が貰えるのです」

「実は、このことはお千ちゃんのお父さんにゃあまり知らせたくないんだ。藤田組のことについて、西南戦争の人夫の賃銀不払いの問題でお父さんに骨を折って貰ったが、うまく運ばなかった関係もあるし、今四千元と家を藤田組から俺にただやると言っただけで信用しないばかりか、逆に俺

は法螺吹きの山師みたいに思われるだけなんだぜ。然しなあお千ちゃん、俺には藤田組がそれぐらいのことをしなけりゃならん訳があるんだよ。もし藤田組が俺の申出を断わったならば、藤田組の屋台骨が折れるぐらいならいいが、藤田伝三郎、中野梧一という御歴々の手が後ろに廻るようなことになるんだ。俺は今をときめく藤田組の痛いところはちゃんと搦んでいるんだからなあ」

「藤田組の痛いところって木村さん、どんなこと？」
涙を拭ったお千は固い表情で木村の顔を見守った。

「困ったなあ、そんな怖い顔で睨まれると、俺は気休めに嘘を言ってるんじゃないんだよ、現にこの眼で藤田組の奥座敷で山と積まれた贋札を見、その秘密を外に漏らさぬよう藤田、影山の二人から誓約書を書かされたのだ。もし俺の僅かばかりの頼みを聞いてくれなければ、お恐れながらとお上に訴え出れば、今世間で騒動している二円紙幣の贋札をばらまいた大本は藤田組だとわかり、四千や五千の端金どころの話じゃないんだ」

「じゃ、あの藤田組が贋札を作って流したというのね」

「作ったか貰ったか、そりゃわからんが、お上の噂じゃ、五百倍の顕微鏡で見なければ真物と偽物の区別がつかんという程上手に作ってあるから、多分外国で贋札を作らせ日本に持ちこんだのだらうといっている。まあ、こんな話はどうでもいい、つまりこんな事情だからお千ちゃん、もう暫

くの辛抱だ、わかったね」

お千は二、三度瞬きすると眼を伏せて、

「私にや頭がこんがらがってよくわからないけど、あまり恐ろしいことはしないがいいわ。藤田組みたいな大金持を向うに廻してお金や家を強請りとするなんて——それより、私と一緒に逃げましょうよ、後はお母さんがうまくやってくれるって言ってるんだから……」

お千は、質札行使の元兇が藤田組であり、その秘密を木村が握っていると聞いて、木村の身边に幽かに犯罪の匂を感じとった。そして、物欲と権勢欲にとりつかれている父石原巖と、愛人木村真三郎との間に地下茎のように結びついているものがあるように思った。薄氷を踏む不安と危惧の戦慄の中にあっても、お千は木村と別れようなどと考えない。この人と一緒に暮すことが出来れば、どんな苦しみにも耐えていこうと、社会の垢に汚れぬ娘のひたむきの愛は結局木村と共に不幸の谷間に滑りこむことになった。見栄坊の木村の咄嗟に頭にひらめいた空想の虚像は相拮抗する薩長藩閥の争いの上に巨きく浮び上がって井上馨参議と藤田組質札事件として明治の裏面史に長く疑問の尾をひいたのである。

お千が金盞花の咲き乱れた花壇の小路を通り、裏木戸を開けて石原の庭に消えると木村は、濡縁に這い出て、お千の肌の温もりが残っている板の上に手を当てた。髪油の残り香が漂っている。木



村は情欲の発作^{ほつき}を覚えると同時に、お千に対する愛憐の情がわいた。お千だけはこの事件に捲きこま
せたくない、いずれ藤田組とのもつれは清算しなければならぬが、暫く石原との関係を断つて、藤
田から千か二千の泪金を貰つて、その上で石原を口説きおとそうと思つた。

木村は急に起ちあがると、「そうだ、唐川に会つて相談しよう、彼奴^{あいつ}なら度胸^{どきょう}もあるし、腕もたつ。
その上長州ときいただけでも額に青筋をたてる長州嫌いだ、うん、それがいい」と自分に言い聞か
せるように呟^{つぶや}いた。

明治十二年の夏、唐川卓二は東京警視局に中警視安藤則命を訪ねた。唐川は自分は嘗て西南戦争
の際、大警視川路利良が巡查をもつて編成した別働隊に加わり、私学校の兵と戦い、幾度か抜刀斬
込み隊として活躍したのが川路閣下^{かつか}のお目にとまり、現在迄閣下の知遇を受けている者だと述べた
後、

「実は閣下、容易ならぬ奇怪な話を耳にしたので、閣下に御報告に参つた次第です。本来なら私
が直接川路閣下にお話しせねばならぬ筈ですが、川路閣下は目下欧州に洋行中のことですから、川
路大警視の特に信任の篤い安藤閣下に申し上げます。

最近国内に二円紙幣の贋札が多数流通していることは閣下も已に御承知^{すで}と思いますが、この紙幣

は藤田組の手によって秘かに使用されており、更に驚くべきことは、この贋札が、洋行をしていた井上参議がドイツにおいて作製させたものを藤田組に送りこんだという事実であります。井上参議については……」

と唐川が淀みなく一気に喋るのを安藤は、

「ちょっと待て、君はなにを証拠でそんな馬鹿げたこと喋るんだ。ここをどこだと思う、町の銭湯や床屋で勝手な世間話をするのと訳が違うぞ。仮初めにも政府の大官井上参議がドイツで贋札を作らして日本に送るなどとは、常識のある者の言えることか」

「閣下、私は世間の噂話や、悪意の臆測で井上、藤田組の悪口を述べにわざわざ厳肅なこの警視局にやってきたではありません、ちゃんと生きた証人がいるからこそ参ったのです。どうかその証人を取調べて頂きたいのです。明治九年十月洋行中の井上参議から大阪藤田組に送られた箱の中に何が封じこまれていたか、又当時藤田組の家にあつた反物の中になんが何が巻込まれていたか、それを発見した男が、手代の藤田辰之助、高山陽治の両名からどのような処置をとられたか、十分調べてみる価値があると思います。井上参議は已に南部藩の尾去沢銅山を村井茂兵衛から強奪した嫌疑を受け罰金三十円を課せられており、藤田組は西南戦争で火事泥棒みたいな荒稼ぎをして巨万の富を得ている、いわば札付の人物じゃありませんか。それにこの贋札が出て以来、紙幣の信用がガタ落

ちに落ちて、現今の物価高はどうです」

安藤は卓を叩いて怒鳴^{どな}った。

「やめろ、そんな演説は聞きたくない。問題は、証人の住所姓名にあるんじゃない、何処の何者が、藤田組でその贋札を見たというのだ」

「大阪府、南区、西坂町に住んでいる元藤田組の手代木村真三郎という男です。ここに住所姓名を書いたものを置いていきますから、詳しく取調^{きうてう}べの程お願いします。安藤閣下、閣下は利にきとい大阪商人がどんなことを言っているか知らんでしょう。大阪じゃ、虫眼鏡で見ても判らぬような贋札が流れているようじゃ、安心して商売は出来ぬ、もうお上の紙幣なんか信用にならんなど言っていますよ。以上申上げたことは国を思う赤誠の一端で決して悪意のあることじゃありませんから——。では大切な執務時間をお妨げして済みません、失礼します」

唐川は木村の住所姓名を書いた紙片を安藤の卓上に置くと床を鳴らして立去った。

安藤中警視は腕組みをしたまま、卓上の紙片を睨^{にら}んで考えこんでいたが、唐川が去って暫くすると、荒々しく卓を叩いた。警官が急いで部屋に入ると、

「今の男はどうした」

「先程出て行きましたが」

「そうか、見つかったら連れ戻してくれ、しかし、もう姿を消しただろう」

「では、さっそく手配しましょうか」

「いや、無理はせんでもいい、そのうち何もかも判るだろう」

警官が部屋を出ると、安藤は、

「ああ何もかも腐っているのやら、狂っているのやら、さっぱりわからん世の中だ。だが仮に今の男の喋ったようなことが事実とするなら、こりゃ禪を締めてかからんと大変なことになるぞ」

と独白し、藤田組検査の手続き、方法について順序を考えはじめた。

その頃警視局前から俤に乗った唐川は呉服橋を渡り両替町を通っていた。

「旦那、真当のどこ、一体どこに行くんです」

若い俤夫は俤を停めて唐川の方を振向いて尋ねた。

「さあ、どこに行ったらいいだろう。兎も角金は払うから、お前の気の向いた方にやれ」

「冗談じゃない、自分の行く先もわからずに俤に乗る訳はないでしょう。警視局前から、急いで真直ぐに行け、それから、左に行け、右に行けとこの両替町迄走らせておいてお前の気の向いた方に行け、これじゃ落語に出る酔っぱらいみたいな話じゃありませんか」

俤夫は口を尖らせて難詰した。

「実は東京の地理不案内だから、俺も弱ってるんだ」

「いくら地理不案内だって、東京にやってきた以上、何か用事があるんでしょう。その用事をす
ますには、宿屋に泊まるとか、知り合いの家に尋ねていくとか——」

「その用事も済んだのだ。知人もないことはないが住所を忘れた」

「じゃ、国許に帰ればいいのに」

「いや、当分東京におりたい。確実に泊めてくれる金のかからんところもあるにはあるが——」

「じゃ、そこに行きましよう」

「やめとこう、警視局の拘留所じゃ、少し不便だからなあ」

「旦那は警視局に留めおかれるようなことでも、やらしたんですかい」

「いや、そんなことじゃない。安藤警視が俺から聞き出したことが残っていると思うんだけど、
警視局などというところは面白くないところで、永くおれないから逃げだしたのだ」

「奇妙な客にひつかかって弱ったなあ——旦那、それじゃ面白いところに行きましよう」

「面白いところとは女郎屋のことだろう、それなら御免だ——まあ、気の向いた方に行け、その
うまい考えが浮ぶから——」

俣夫は舌打ちすると、梶棒かじぼうを抱いて、のろのろ歩き出した。本石町ほんごくちやうを過ぎた頃、唐川は俣夫に声